

E-19 子どもの家事参加態度に作用する要因に関する研究 (第1報)
・鈴木敏子 (高知大教育) 舟橋久子 (高知大教育附養〔非〕)
西本恵子 (高知学園短大)

目的 近年、子どもの生活実態は諸側面から問題にされている。その一つに家事を手伝わなくなったことがあげられ、身心の発達^の歪み等とも関連して捉えられている。一方、家事労働への子どもの参加は、子どもの事物の認識、身心の発達、家族関係のあり方、技術や文化の伝承等々の面から改めてその意義が見直されている傾向もみられる。そこで私達は、子どもの家事参加の状況を知り、どのような生活背景が子どもの家事参加態度を規定しているのかということ^を明らかにしてみることにした。

方法 調査対象は、高知市内で人口が急増した住宅化地帯にある^{ハナ}秦小学校、農村的地域にある五台山小学校と布師田小学校を選び、1・3年生の父と母、5・6年生の児童と父と母とした。調査方法一児童はクラスで一斉に、父母は児童を通して自宅で記入するアンケート。調査時期一1979年12月初旬。回収は児童400票で100%、父747票で87%、母は774票で95%。その内、1・3年は父母の回答がそろっている318組を、5・6年は児童、父、母三者の回答がそろっている316組を分析に使用した。

結果 家事手伝いを「よくする」5・6年男子は8%、女子は13%、「少しする」男子は49%、女子63%、「あまりしない」と「全然しない」男子は44%、女子22%で、子どもの家事参加への男女差は顕著である。また、母親の態度に、上級学年になるほど積極的に働きかけている様子がみられるように、子どもの発達段階による差もはっきりしている。この他、家庭や母親の職業、家族構成、住居の形態、父親の家事参加状況、両親の意識、家庭料の好き嫌い等々と子どもの家事参加状況との関連を明らかにしていく。